

源氏物語評釈

第五卷

玉鬘
常夏

初音
篝火

胡蝶
野分

螢

玉上琢彌

角川書店

源氏物語評釈 第五卷

全十四卷



昭和四十年十二月三十日 初版発行

定価 二〇〇〇円

著作者

たまがみ 上 琢弥

発行者

角 川 源 義

印刷者

中 村 政 二

製本者

鈴 木 俊 一

発行所

株式会社 角 川 書店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座 東京 一九五二〇八番
電話東京 (265) 七二二 (代表)

© T・Tamagami 1965

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替え致します

信教印刷・鈴木製本

目次

凡例

玉鬘

一 夕顔回想

とし月へだたりぬれど、あかざりし夕顔を、つゆ忘れたまはず

二 若君の九州下向

かの西の京にとまりし若君をだに、行くへも知らず

三 少弐の遺言

少弐任はてて、上りなむとするに、はるけきほどに

四 若君の成長

その人の御子とは、たちの人にも知らせず、たゞ孫の

五 大夫の監の求婚

大夫の監とて、肥後の国にぞう広くて

六 乳母と監と応対

心を破らじとて、おばおとゞ出であふ

七 姫君上京

次郎が語らひとられたるも、いと恐ろしく心うくて

縛戎人

七

三

三

三

三

七

三

四

七

八 九条に宿る

九条に、昔知れりける人の残りたりけるを、とぶらひ出でて

九 八幡参詣

住みつくべきやうもなきを、母上おとゝ明け暮れ嘆き

十 初瀬参詣

うちつぎては、仏の御なかには初瀬なむ

十一 椿市の宿

あゆむともなく、とかくつくろひたれど、足の裏

十二 右近、隣に宿る

さるは、かの世と共に恋ひ泣く右近なりけり

十三 右近、人々と語る

からうじて、おぼえずこそはべれ、筑紫の国に

十四 一同参籠

日暮れぬ、といそぎたちて、御あかしの事どもしたゝめ

十五 三条の願い

国々より、あなか人多くまうでたりけり、この国の守

十六 右近の願文

つくし人は、三日こもらむと心ざしたまへり、右近は

十七 乳母の依頼

明けぬれば、知れる大徳の坊におりぬ、物語り心やすく

十八 右近と姫の唱和

参りつどふ人の有様ども、見くださるゝかたなり

十九 人々帰京

秋風、谷よりはるかに吹きほりて、いとほだ寒きに

二十 右近、源氏に報告

右近はおほ殿に参りぬ、この事を、かすめ聞ゆるついで

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

二十一	姫に消息	一一
	かく聞きそめてのちは、召しはなちつゝ、さらば	
二十二	姫の思い	一二
	さうじ身は、たゞかごとばかりにても、まことの親の	
二十三	東の御方の西の対	一三
	住みたまふべき御かた御覧するに、南の町には	
二十四	源氏、紫の上に語る	一四
	上にも、今ぞかのありし昔の世の物語きこえ出で	
二十五	花散里後見	一五
	かくいふは九月の事なりけり、渡りたまはむ事	
二十六	源氏、姫と会见	一六
	御車三つばかりして、人の姿どもなど、右近あれば	
二十七	源氏、紫の上に説明	一七
	めやすく物したまふを、うれしくおぼして、上にも	
二十八	夕霧、姫に挨拶	一八
	中将の君にも、かゝる人を尋ね出でたるを、用意して	
二十九	姫づきの人々の現状	一九
	心の限り尽くしたりし御すまひなりしかど、あさましう	
三十	歳暮の衣くばり	二〇
	年の暮に、御しつらひの事、人々の御装束など、やむことなき	
三十一	末摘花の返事	二一
	皆御返りどもたゞならず、御使のろく、こゝろくゝなる	
三十二	源氏の歌論と女性論	二二
	よろづの冊子、歌枕、よく案内知り、見つくして	

初音

- 一 六条の院の新春
年たちかへるあしたの空のけしき、なごりなく曇らぬ 一五
- 二 新春の紫の上
春のおとよのお前、とり分きて、梅の香も 一五
- 三 新春の明石の姫君
姫君の御方に渡りたまへれば、わらは、しもつかへなど 一六
- 四 新春の花散里
夏の御すまひを見たまへば、時ならぬけにや 一六
- 五 新春の玉鬘
まだいたくも住みなれたまはぬほどよりは 一六
- 六 新春の明石の御方
くれがたになるほどに、明石の御方に渡りたまふ 一七
- 七 二日の朝帰り
まだあけぼののほどに渡りたまひぬ、かくしもあるまじき夜 一七
- 八 六条の院の臨時客
今日は臨時客のことにまぎらはしてぞ、おもかくしたまふ 一七
- 九 二条の東の院の人々
かくのゝしる馬車の音をも、物へだてて聞きたまふ御方々 一八
- 十 東の院の末摘花
さわがしき日ごろ過ぐしてわたりたまへり 一八
- 十一 東の院の空蟬
うつせみの尼ごろもにも、さしのぞきたまへり 一九
- 十二 その他の人々
かやうにても、御かげに隠れたる人々おほかり 一九

十三 六条の院の男踏歌

今年は男踏歌あり、内より朱雀院に参りて

一九八

十四 翌日の六条の院

夜明けはてぬれば、御方々かへりわたりたまひぬ、おとよの君

二〇六

胡蝶

一 三月、春の御前の舟楽

やよひの二十日あまりの頃ほひ、春の御まへのありさま

二二一

二 中宮の女房の来訪

中宮このころ里におはします、かの春まつそのは、とはげまし

二二五

三 管絃の御遊

夜に入りぬれば、いと飽かぬこゝちして、御まへの庭に

二三五

四 玉鬘、注目の的となる

夜も明けぬ、あさほらけの鳥のさへづりを、中宮は物へだてて

二三八

五 兵部卿の宮の求婚

兵部卿の宮はた、年頃おはしける北の方もうせたまひて

二三〇

六 中宮の季の御読経

今日は、中宮の御読経のはじめなりけり、やがてまかでたまはで

二三三

七 君達の玉鬘執心

西の対の御かたは、かの踏歌のをりの御対面ののちは

二四一

八 更衣のころ、玉鬘への懸想文

ころもがへの今めかしうあらたまれる頃ほひ、空のけしきなどさへ

二四五

九 兵部卿の宮の文

兵部卿の宮の、程なくいられがましきわびごとををかきあつめ

二四七

十 右大将らの文

右大将の、いとまめやかに、こと／＼しきさましたる人の

二四九

十一 源氏の教訓

右近を召し出でて、かやうにおとづれきこえむ人をば

二五二

十二 源氏、人々を評す

かう何やかやと聞ゆるをも、おほす所やあらむと

二五八

十三 源氏と玉鬘と唱和

御前ちかきくれたけの、いと若やかにおひたちて

二六三

十四 紫の上に玉鬘をほめる

殿は、いとぶらうたしと思ひきこえたまひて

二六五

十五 源氏、玉鬘に迫る

心にかゝれるまゝに、しば／＼わたりたまひつゝ

二六七

十六 玉鬘の悩み

女君も、御としこそすぐしたまひにたるほどなれ

二七七

十七 翌朝、源氏の文

またのあした御文とくあり、なやましがりてふしたまへれど

二七九

十八 玉鬘の不安

色に出でたまひてのちは、おほたの松の、と思はせたることなく

二八一

十九 求婚者たちの動き

宮、大将などは、とのの御けしき、もてはなれぬさまに

二八三

螢

一 玉鬘の困却

今はかく重々しき程に、よろづのどやかに思ししづめ

二八七

二 兵部卿の宮との文通

人さまのわらゝかに、気近くものしたまへば、いたくまめだち

二九〇

三 兵部卿の宮、玉鬘を訪問

殿はあいなくおのれ心げさうして、宮を待ちきこえたまふも

二九四

四 源氏、螢の光で玉鬘を見せる

姫君は、東面にひき入りて大殿籠りにけるを

二九六

五 兵部卿の宮と玉鬘と唱和

宮は、人のおはする程、さばかりとおしはかりたまふが

三〇三

六 源氏の反省

姫君は、かくさすがなる御けしきを、わがみづからの憂さぞかし

三〇八

七 五月五日、源氏玉鬘と語る

五日には、馬場の大殿に出でたまひけるついでに、わたりたまへり

三一〇

八 兵部卿の宮と玉鬘と贈答

宮より御文あり、白き薄様にて、御手はいとよしありて

三二三

九 六条の院の競射

殿は、東の御方にもさしのぞきたまひて、中將の今日のつかさ

三二七

十 花散里と弟宮を批評する

大臣はこなたに大殿籠りぬ、物語など聞えたまひて

三三六

十一 源氏と花散里の關係

今はたゞ大方の御睦にて、おましなこともことごとくにて大殿籠る

三三九

十二 長雨に絵物語

長雨、例の年よりもいたくして、晴るゝ方なくつれづれなれば

三三三

十三 源氏の物語論

殿もこなたかなたにかゝる物どもの散りつゝ、御目に

三四〇

十四 物語に寄せて玉鬘を口説く

さてかゝる故言の中に、まろがやうに実法なるしれものの

三四一

十五 紫の上とこまのの物語

紫の上も、姫君の御あつらへにことつけて、物語は棄て難く

三四三

十六 源氏の物語教育論

姫君のお前にて、この世なれたる物語など、な読み聞かせ

三四五

十七 夕霧と女君たち

中將の君を、こなたには氣違くもてなしきこえたまへれど

三〇八

十八 内大臣の嘆き

内の大臣は、御子とも腹々いと多かるに、その生ひ出でたる

三〇三

十九 内大臣の夢占い

夢見たまひて、いとよく合はするもの召して、合はせたまひける

三〇五

常夏

一 君達、六条の院に参向

いとあつき日、ひむがしの釣殿に出でたまひてすゝみたまふ

三〇九

二 内大臣の娘を話題にする

いかで聞きしことぞや、大臣のほかばらのむすめたづね出でて

三一三

三 源氏と玉鬘、内大臣の噂話をする

たそがれどきのおぼくしきに、同じ直衣どもなれば

三一六

四 源氏、和琴の論

月もなきころなれば、燈籠におほとなぶらまゐれり

三七四

五 源氏と玉鬘の唱和

人々近くさぶらへば、例のたはぶれこともえ聞えたまはで

三八〇

六 源氏の思案

渡りたまふことも、あまりうちしきり、人の見たてまつり

三八二

七 内大臣、源氏を批評

内の大殿は、この今の御むすめのことを、殿の人も許さず

三八六

八 内大臣、雲居の雁の昼寝を叱る

とかく思しめぐらすまゝに、ゆくりもなく軽らかにひ渡り

三九〇

九 内大臣、弘徽殿女御に今姫君を託す

大臣、この北の対の今姫君を、いかにせむ、さかしらに迎へ率て

三九七

十 内大臣と今姫君

やがてこの御方のたよりに、たゞすみおはしてのぞきたまへば

三九

十一 今姫君と五節

よき四位五位たちの、いつきこえて、うち身じろきたまふにも

四〇

十二 今姫君、女御に文を送る

さて、女御殿に参れと宣たまひつるを、決々なるさまならば

四二

十三 女御の返事

女御の御方の台盤所に寄りて、これ参らせたまへといふ

四七

篝火

一 内大臣の今姫君と源氏と玉鬘

この頃の世の人のことぐさに、内の大殿の今姫君

四三

二 初秋、玉鬘と源氏

秋になりぬ、初風すしく吹きいでて、せこが衣も

四七

三 夕霧と柏木兄弟、参上

御消息、こなたになむ、いとかげ涼しき篝火にとどめ

四三

野分

一 秋好む中宮方の野分

中宮のおまへに秋の花を植ゑさせたまへること

四九

二 夕霧、紫の上をかいま見る

南の御殿にも、前栽つくろはせたまひける折にしも

四三

三 源氏と紫の上

いとうたてあわたゞしき風なめり、御格子おろしてよ

四七

四 夕霧の見舞

人々まゐりて、いとかめしう吹きぬべき風にはべり

四九

五 夕霧、三条の宮を見舞う

道すがらいりもみする風なれど、うるはしくものしたまふ

四五

六 夕霧、紫の上を思ふ

中將、夜もすがら荒き風の音にもすゞろにもあはれなり

四五

七 夕霧、六条の院の南の上に至る

あかつきがたに風すこししめりてむらさめのやうに降りいづ

四五

八 源氏、夕霧を使いの中宮を見舞う

御格子を御手づからひきあげたまへば、気近きかたはらいたさ

四五

九 夕霧、中宮を訪う

中將おりて、中の廊の戸より通りて参りたまふ、朝ぼらけのかたち

四六

十 夕霧の復命。源氏、中宮を見舞う

南のおとゝには、御格子まゐりわたして、よべ見棄てがたかりし花

四六

十一 源氏、明石の御方を見舞う

こなたよりやがて北に通りて、明石の御方を見やりたまへば

四七

十二 玉鬘を見舞う

西の対には恐しと思ひあかしたまひける名残に、ねすぐして

四七

十三 夕霧かいま見て驚く

中將、いとこまやかに聞えたまふを、いかでこの御かたち見て

四七

十四 花散里を見舞う

東の御方へ、これよりぞ渡りたまふ、けさの朝寒なる

四八

十五 夕霧、明石の姫君のもとで手紙を書く

むつかしき方々めぐりたまふ御供にありきて

四八

十六 夕霧、明石の姫君をかいま見る

渡らせたまふとて、人々うちそよめき、几帳ひきなほしなどす

四八

十七 夕霧、大宮を見舞う。内大臣も来る

おは宮の御もとにも参りたまへれば、のどやかにて御おこなひ

四九

さしえ目次

玉鬘（中扉）初瀬寺山門付近	元
夕陽の須磨浦	二七
志賀島西岸	二九
水城・太宰府都府樓址・観世音寺	三三
太宰府天満宮・太宰府国分寺・太宰府天満宮の梅	三三
鏡山遠望（手前は虹の松原）	四〇
鏡山より唐津湾を望む	四一
瀬戸内海（鷺羽山より八島を望む）	四二
一遍聖絵 船	四三
絵入源氏物語 「ひときの灘もさはらざりけり」	四四
白氏文集第三 縛戎人（神田家蔵）	四六
石清水八幡宮（京都府）	四六
箱崎八幡宮（福岡市）	四六
年中行事絵巻第三卷 「ことさらにかちより」	四六
壺装束	四七
海石榴市観音の道標	四七
年中行事絵巻第四卷 軟障・幔・幕	四七
絵入源氏物語 「三人ながらむせかへり、いとむつかしく、せきかねたり」	四八
初瀬寺 山門・入口・渡廊	四八
初瀬寺観世音（本尊）	四八
絵入源氏物語 「手をひきはなたず、をかみ入りてをり」	四八

十一面観音・聖観音 (観世音寺)

初瀬寺本堂の釣燈籠

初瀬川

扇面古写経 市女

絵入源氏物語 「御目おしのごひたまふ」

初音 (中扉) 隆能源氏絵 竹河(一)

平等院鳳凰堂壁画 生ける仏の御面

隆能源氏絵 宿木(一) ふところ手

隆能源氏絵 柏木(三) 源氏のけさう

小松ひき (蔵島神社蔵小形檜扇第三册表)

絵入源氏物語 「うぐひすのすだし松の根をわすれめや」

年中行事絵巻第九卷 臨時の客

下品上生の要文 (鳳凰堂の扉の色紙形)

那智滝図 (根津美術館蔵)

絵入源氏物語 「世のつねならぬ花を見るかな」

年中行事絵巻第七卷 女踏歌図

垂纓冠

胡蝶(中扉) 胡蝶の舞 舞楽図説

駒競行幸絵巻 舟楽

春日権現験記絵 池・小山・水鳥

扇面古写経 「みづら」

西本願寺三十六人集 『能宣集』下十七裏の唐紙模様

象牙尺 (正倉院蔵)

九

九

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

一〇

絵入源氏物語 「春の日のうらゝにさして行く船は」

三三

駒競行幸絵巻東宮行啓の図 門前に庶民群集

三七

絵入源氏物語 「こてふにもさそはれなまし心あり」

三九

呉竹 (清涼殿東庭北側)

二六三

螢(中扉) 隆能源氏絵 宿木(二)

二六五

隆能源氏絵 柏木(一) 三尺の几帳と四尺の几帳

二〇〇

絵入源氏物語 「こゑはせて身をのみこがす螢」

二〇五

隆能源氏絵 宿木(三) 軒の琴・雨落石

二〇六

紫式部日記絵巻 直衣の文様 冬 唐の花丸

二二

阿字義 直衣の文様 夏 三重襷に花菱

二二

貞丈雑記卷一 薬玉

二五

春日権現験記絵 すそこの几帳・朽木形の几帳

三二

隆能源氏絵 東屋(一) すそこの几帳 早蕨 朽木形の几帳

三二

平家納経殿王品見返絵 裳・唐衣

三三

絵入源氏物語 「舍人どもさへえんなる装束」

三三

年中行事絵巻第七卷 競射・競馬

三四

年中行事絵巻第一卷 桐 檣

三六

住吉神社

三三

常夏(中扉) 軒つり燈籠 (京都御所清涼殿)

三五七

絵入源氏物語 「西川より奉れるあゆ」

三六〇

五島本紫式部日記絵巻 束帯

三六一

隆能源氏絵 鈴虫(二) 「高欄に背中おしつ」

三六一

氷室 (仙洞御所)

三六二

前栽 (京都御所、御常御殿の南庭)

扇面古写経 「すきたまへる肌つき」

病草紙 「うちやられたる御ぐし」

春日権現験記絵第三卷 「髪の裾の切りそろえてある所」

絵入源氏物語 「うたふねはいさめきこゆるものを」

不動明王像 (明王院蔵)

絵入源氏物語 「すころくをぞ打ちたまふ」

すご六 (正倉院御物)

餓鬼草紙 「別当うぶやに侍ふ」

勿来の関

田子の浦

虚空蔵菩薩念誦次第紙背面假名消息断簡

秋萩帖 草の文字

すまの浦

箱崎の松

唐人の化粧 (胡服の美人図)

篝火(中扉) 蜂須賀本紫式部日記絵卷

筋切古今集

絵入源氏物語 「かゝり火のたよりにたぐふけぶり」

北野天神縁起第三卷 西の対の前の遣水

笏狛子

野分(中扉) 寢覚物語絵卷 第二段

絵入源氏物語 「花の上を思し嘆く」

三七二

三九一

三九二

三九三

三九四

三九四

四〇一

四〇一

四〇五

四〇五

四一四

四一五

四一六

四一八

四一九

四二二

四三三

四三八

四三〇

四三二

四三四

四三七

四四一